みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Research Trends and History on Indigenous Peoples of Kamchatka

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡部, 裕 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009996

岸上伸啓編『環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する研究動向』
国立民族学博物館調査報告　156:79–97(2022)

ロシア・カムチャツカの先住民に関する研究動向とその歴史

渡部　裕
（元北海道立北方民族博物館）

1 はじめに
2 カムチャツカ先住民の歴史的動向
2.1 イテリメンの人口減少
2.2 エベンの移住
2.3 アリュートの移住
3『カムチャツカ誌』とジェサップ北太平洋遠征調査について
3.1 送り儀礼について
3.2 ヨヘルソンの調査
3.3 ボゴラスの調査
4 イテリメンに関するオリガ・ムラシュコの研究
5 日本人によるカムチャツカおよび周辺地域の研究
5.1 ソ連体制にともなう集団化とその変遷
5.2 トナカイ遊牧の発展──ソホーズ・カラギンスキーの発展状況
5.3 集住化と集落の再編
5.4 先住民の生活と変化
5.5 ペレストロイカ以降の先住民の経済的状況
6 日本人漁業者と先住民の接触
6.1 日本人はどのように捉えられていたか
6.2 語り継がれる日本語の語彙
6.3 日本人漁業者と先住民との接触の在り方
7 ペレストロイカ以降の人口減少
8 先住民における疫学転換と変死
9 まとめ──新たな制度導入と研究課題

1 はじめに

ペレストロイカ以降，ロシア・カムチャツカでは，日本人研究者による言語学，考古学，文化人類学の分野で，先住民の人類学的調査が活発に行われてきた。文化人類学の分野ではコリヤーク，イテリメンの伝統的な文化，ソ連期の社会主義経済体制下の集団化政策とそれにともなう集落の再編（新しい集落への移住と集住化，集落の閉鎖と再移住），ソ連体制崩壊の影響について集中的に調査が行われた。さらに，その後の先住民経済について，新たに認可を受けた地域の先住民団体に付与されるサケ漁業の権利やトナカイ遊牧への補助金が先住民経済の活性化を促すことが期待され，そうした動向についても調査が行われた。

また，1945年８月のソ連対日参戦以前，極東のロシア／ソ連領海内で行われていた日本人による漁業（北洋漁業と称された）にともなうカムチャツカ先住民と日本人漁業者との接触についても調査が行われた。

本論文ではこれら諸研究の概要を紹介するとともに，この執筆を通じて，現在のカム

チャツカ先住民の人類学的調査を考える上で，クラシェニンニコフ『カムチャツカ誌』に関係する調査ならびにジェサップ北太平洋遠征調査の重要性と意義を改めて認識させられたところである。僻遠の地であるカムチャツカでの人類学的調査の事例は少なく，ソ連体制のもとで閉鎖されていた時代も長かったことから，研究動向についても近年以降のものとなることをあらかじめお断りさせていただきたい。

なお，すでに，岸上伸啓（国立民族学博物館）によって，環北太平洋地域という広範な地域における先住民文化の研究動向が網羅的かつ詳細に報告されており，カムチャツカおよび周辺の民族研究の全体像については岸上（2015）を参照いただきたい。

2　カムチャツカ先住民の歴史的動向

カムチャツカ南部には定住的漁労民イテリメン（Itelmen;「イテリメン」は自称，ロシアとの接触時から「カムチャダール」と呼ばれてきた），その北部にコリヤークが居住し，彼らは定住的狩猟漁撈民・海岸コリヤーク（Maritime Koryak）とトナカイ遊牧を主として生業とするトナカイ・コリヤーク（Reindeer Koryak）に二分されている。コリヤークにはカムチャツカ半島の最峡部周辺にアリュートル（Alutor）集団，ベーリング海側北部のアリュートル岬からチュコトカ南部のナワリン岬沿岸にケレック（Kerek）集団が居住していたことが知られている。また，カムチャツカ半島最南部および千島列島最北部にはクリル（Kuril 千島アイヌ）が居住していた。これら民族集団に隣接するか近隣に居住してきた民族集団を挙げておきたい。コリヤークの北部にはチュクチ（Chukchi）およびシベリア・ユピック（Siberian Yupik），北西部にはユカギール（Yukagir），ヤクート（Yakut），エベン（Even）などが居住してきた。

カムチャツカの先住民は，ロシアとの接触後，武力による制圧，毛皮税の徴収，ロシア人植民の影響，キリスト教の布教，外来者からもたらされた伝染病など外的な圧力にさらされてきた。こうした影響は人口減少をもたらすとともに，いっぽうでは先住民と植民者との婚姻を増加させた。さらに外来のロシア人の流入だけではなく，他地域からの民族集団の流入や強制移住による民族集団の定着も後に生じている。

2.1　イテリメンの人口減少

カムチャツカに居住する先住民は，1697年のロシアとの接触以降，コサック兵や毛皮商人との接触の軋轢から，各地でロシアに対する先住民の反乱がおよそ30年近く続いた。北部のチュコトカのチュクチにおいてもし烈な戦いが続いた（黒田 1992）。

カムチャツカに居住してきたイテリメン，コリヤークは17世紀末から18世紀前半にかけて，ロシアによる征服，ベーリング探検隊の影響，その後の植民地化，さらに麻疹など伝染病の流行などかによって人口が減少した。

とくに接触初期におけるイテリメン集団は，ロシアに対する反乱を鎮圧され，多くの死者が出たとされている。また，ロシア人による使役も大きな影響を与えた。たとえば，第一次ベーリング探検では，1727年 9 月 3 日，オホーツクからカムチャツカ南西部ボリシャイア川河口のボリシェレツクにベーリングをはじめ多くの人員が大量の荷物とともに到着した。イテリメンのイヌ橇を徴発して，ボリシャイア川を遡行，分水嶺を越え，カムチャツカ川上流部に達し，その後，カムチャツカ川を下って翌1728年 3 月11日，カムチャツカ川河口にたどり着いた。サケの遡上が豊かなカムチャツカ川の流域には多くのカムチャダールの集落が集中していたので，ベーリング一行は人手と食料には困らなかったと推定されるが，多くのイテリメンとイヌ橇が無報酬で動員されたと考えられる。

ロシア人植民者が入植した地域では，先住民人口は大きな減少をこうむり，通例徐々に植民者にとって代わられた（Murashko 1994: 26）。

いっぽう，イテリメンはカムチャツカからアメリカ沿岸へ向かうロシア船の乗組員としても働いていた。ロシアによる北太平洋への進出は，主としてロシア海軍ではなく民間の船が中心であった。初期の船長や水夫長たちは少人数で航海しその半数はカムチャツカの先住民であった。当時，ロシア船はアラスカ沿岸などで何年にもわたって活動したが，船員が命を落とすことも多かった。イテリメンがロシア船に乗組んでいた次の事例が知られている。1763年12月，東部アリューシャンの複数のアリュート集団が協力して 4 隻のロシア船を襲った。乗組員の内，12人（ロシア人 4 人，イテリメン 8 人）だけが生き延びた。ロシア人はこの惨劇の後，報復し，東部アリューシャンにおけるロシアの支配期が始まったとされる（Black 1988: 72）。

モスクワ大学のオリガ・ムラシュコによれば，イテリメンの接触初期の人口推計の試みについては，古くはクラシェニンニコフやステラーが考察し，その後も多くの研究者によって考察・検討されてきた。イテリメンとロシアとの接触の最初の数十年間には先住民に多大な犠牲があったことは疑いないとしながら，イテリメンの接触当時の人口は下限8,000人，上限25,000〜30,000人と結論している（Murashko 1994）。

2.2 エベンの移住

カムチャツカ半島中央部の山岳地帯ブイストル地区では，かつてコリヤークがトナカイ遊牧を行っていたが，なんらかの理由で彼らはチュコト方面に移動し，無人の地となった。1850年代にブイストル地区にトナカイ遊牧民のエベンを中心とした集団が新たに入植した。当時のカムチャツカ州知事 B. C. ザボイカがマガダン州チュコト自治管区の知事に依頼した結果だという。史料によって，1852年に入植者たちはブイストル地区の入植許可証を知事から受け取ったことが知られており，19世紀末頃には，エベンはブイストル地区におよそ500人が居住し，北部から連れてきたトナカイを繁殖させ，その数は20,000〜30,000頭を前後した。彼らのトナカイ遊牧規模は中規模で群の大部分は200な

いし500頭であった（Мурашко 2000）。

2.3 アリュートの移住

アリュートの移住は明確に外部世界から強制的にカムチャツカに移住させられた事例である。これらには再移住，再々移住も含まれるが，概要は次のとおりである。

1799年に設立された露米商会は，アラスカを拠点に毛皮交易を行ってきたが，彼らの毛皮獣捕獲の都合からアラスカの狩猟者を遠隔地に移住させた。アッツ島民の幾人かは東方のウナラスカに移送され，別の者たちは西方のコッパー島（コマンドル諸島のメドヌイ島）へ移送され，アラスカがアメリカに売却された後，彼らの親族から切り離らされしまった。アトカ島民もロシア領時代のコマンドル諸島のベーリング島とコッパー島へ移送された（Lantis 1984: 165）。

レーチコは1819年頃，アリュート30人がベーリング島へ，15人がメドヌイ島へ移住したと推定している。その後，さらにアリュートの移住が行われ，最終的に移住者は一島につき約100人と推定した。コマンドル諸島のアリュート自身は1825年に移住したものと考え，彼らは1925年夏，メドヌイ島への移住100年祭を執り行った。これら移住したアリュートは過酷な労働条件によって多数が亡くなったが，新たな移住によって補充された。これらの補充にはプリビロフ諸島およびアンドレヤノフ諸島からの移住者があてられた（レーチコ 1943，ロシア語での出版は1927年）。

3 『カムチャツカ誌』とジェサップ北太平洋遠征調査について

カムチャツカの先住民の伝統的な文化を考える上で，クラシェニンニコフやステラーによる調査，ジェサップ北太平洋遠征調査プロジェクトが派遣したヨヘルソンによるカムチャツカ調査とボゴラスによるチュコトカ調査は豊富な民族誌をもたらしている。現代のカムチャツカ先住民文化と関連する事項を挙げてみたい。

3.1 送り儀礼について

クラシェニンニコフは南部のイテリメン（カムチャダール）の儀礼と北部のイテリメンの儀礼は異なるとし，その両方について観察した内容を記している（Krasheninnikov 1972: 246–258）。南部のイテリメンについては，オホーツク海側に位置するキフチク川河畔の集落において3日間滞在して見聞したことを記している。半地下式住居で行われた“祭り”の解釈は，ヨヘルソンが指摘するとおり（Jochelson 1975: 65–66）であろう。この儀礼は“クジラ祭り”であって，来てくれたクジラを送る儀礼であることは疑いの余地がない。これらクジラ祭りにはアザラシも登場し，いっしょに送られる。

ヨヘルソンもまた，ペンジナ湾沿岸のコリヤークのクジラ祭りを詳細に観察していて，



写真１　Khantai 像（2008年８月，カムチャツカ南西部オクチャブリスキー海岸の先住民団体の漁場にて，筆者撮影）

『カムチャツカ誌』におけるアリュートルのクジラ儀礼にも通底する儀礼の精神をみてとれる。しかし，クラシェニンニコフが記録した“祭り”は残念ながら現代のイテリメンの人たちの間に伝承されることはなかった。

ソ連体制崩壊後，カムチャツカでは先住のアイデンティティを表象する手段として民族の伝統的な文化に対する関心が高まってきている。たとえば，伝統的にアザラシ狩猟を行ってきたコリヤークの人たちは，冬の初めにアザラシの魂を送る儀礼「ホロロ祭り」を集団の儀礼として行っていた。しかし，ソ連時代には先住民の伝統的儀礼は禁じられていたため，家族だけで静かに「ホロロ」の儀礼を行ったという。現在，「ホロロ祭り」は集団の儀礼として復活してきている（大島 2006）。

いっぽう，イテリメンの人たちの間でも“民族のアイデンティティ”を模索するなかで，カムチャツカ西海岸カブラン村のイテリメンの人たちは失われた祖先の儀礼を復活しようとした。それはクラシェニンニコフの記録のなかにある送り儀礼を現代に蘇らせることである。復活した儀礼の名称はクラシェニンニコフが記述した儀礼のなかで発せられる祈りの言葉“Alkhalalalai”から「アルハラララライ祭り」と称されている。また儀礼の記述のなかに出てくる木製像“Khantai”（この像がどのような形態であるかは詳述されていないが）を再現させている（写真１）。

3.2 ヨヘルソンの調査

ヨヘルソンはカムチャツカの北西部ペンジナ湾沿岸地域および現在のマガダン州のギジガ湾沿岸地域で海岸コリヤークおよびトナカイ・コリヤークの調査を行なったが，広大なコリヤークの居住域を考慮すると極めて限定的な地域である。ヨヘルソンは，限定された場所で長期にわたる定点調査が望ましいと考えていた。しかし，ジェサップ調査では調査期間が限られていることを考慮して，トナカイ・コリヤークの集落調査は4ヶ所の集落で行っている。ヨヘルソンに要求された多くの人類学的データ収集のためであろう。

ヨヘルソンは彼らの調査方法を次のように記している。「アクセルロッド氏（同行した調査者）はヨヘルソン夫人を助手に人体測定を行った。私はコリヤークの説話を記録し，民族資料を収集し，工芸品を購入し，顔の石膏型取りし，シャーマンの呪文を記録した。クエル（Kuel）のコリヤークは初めての民族調査を受け入れ，こちらの期待より友好的で穏やかだった。贈り物をすることでより円滑に調査を行なうことができた。しかし，彼らの慣習や信仰を阻害するようなことは説得できなかった。たとえば，重要な儀礼の機会や場所で木製の火起こし錐で火を起こすことや，古い秘蔵の神像を売ることや，一族（シャーマンが用いる）の太鼓を手放すことや，火葬の前に死者に着せる死装束を譲り渡すことや，悪霊を追い払う仮面を譲り渡すことなどである。

カーメンスコィエのコリヤークの態度は違った。ジェサップ調査には懐疑的であった。彼らは身体測定を嫌がり，特に女性たちは贈り物をされても嫌がった。年配者たちは若い人たちに，録音機について『彼らの声を奪って，彼らは死ぬ』と言って，録音機に向かって歌を歌わせないように説得した。」

ヨヘルソン一行は，630件の人類学的測定，21人分の石膏マスク，595枚の写真，120話のおとぎ話と神話，コリヤークを描いた，あるいはコリヤークが描いたスケッチ50枚，民族学的資料1,440点を収集した。また，「コリヤークおよびツングース（エベン）の歌，シャーマンの呪文およびおとぎ話の録音シリンダーもある。」と述べ，630の測定値の大部分はヨヘルソン夫人によって得られた（Bloch and Kendall 2004: 174–175）。

ヨヘルソンはボゴラスと同様，地下運動“人民の意思”の支持者であった。1885年，逮捕され，2年間の禁固刑の後，コリマ川流域へ10年を超える流刑になり，その地のトナカイ遊牧民ユカギールに関する専門家になっていた。ヨヘルソンはジェサップ調査においてもユカギールを含めるべきとボアズを説得した。ヨヘルソンの調査隊は最後に長距離の移動をともなう調査旅行を行った。1901年8月，オホーツク海を臨むギジガ川河口からけわしい山脈を越えてコリマ川の支流の一つコルコドン川上流部への困難な56日間の旅を開始した。荷駄馬とともに進み，筏や船でコルコドン川そしてコリマ川を船で下ったが，コリマ川は旅の終わりに氷結し，最後の2日間は陸上を徒歩で進まざるを得なく

なったが，10月９日，とうとう河口近くのヴェルフィネ・コリムスクに到着した。途中，ユカギールの元へやって来ると，ユカギールは飢餓の只中にいることが判明し，ユカギールの調査は不可能な状況であった。ヨヘルソンは彼らの支援を要請するため，使者をスレドニ・コリムスクへ送った（Bloch and Kendall 2004: 56–57）。

3.3　ボゴラスの調査

いっぽう，ボゴラスはヨヘルソンに比べると大変広範な地域を対象に調査を行なっている。少人数でイヌ橇を駆使し（ときにはトナカイ橇を），橇が使えない季節には皮船さえ利用し，チュコトカの各地およびセント・ローレンス島で調査を行なった（Bogoras 1975）。資料収集を担当する彼の妻のソフィアはマリンスキー・ポスト（現在のアナディール）を拠点に，厳しい冬の間，内陸のマルコボとの間を行き来して，現在アメリカ自然史博物館に収蔵されている資料2,192点の大部分を収集し，記録を付けた（Bloch and Kendall 2004: 73）。

ボゴラスはさまざまな先住民について強い関心をもっていたと推察され，ジェサップ調査においてもチュクチやシベリア・ユピックにだけ興味をもっていたわけではなかった。ボゴラスは1900年12月，ヨヘルソンとともにカムチャツカ北東部のカーメンスコィエ（Kamenskoe）で過ごしたが，そこでの１ヶ月間はコリヤーク語を学んですごしたという（Bloch and Kendall 2004: 128）。その間，ボゴラスが録音したコリヤークの神話14話が，ヨヘルソンの『コリヤーク民族誌』に所収されている（Jochelson 1975: 284–297）。

ボゴラスはさらに南下して調査を行なうため，カムチャツカの奥地に進んでいったが，その動機はマリンスキー・ポストでカムチャツカ・コサックたちから「北部のカムチャダール（イテリメン）」は自分たちの言語を話すカムチャツカの元来の住民であり，カムチャダールの八つの集落を見つけることができると聞かされていたからである（Bloch and Kendall 2004: 128）。ボゴラスはその地であるカムチャツカ北西部に到達し，チギリ（Tigil’），ウトホロック（Utkholok），カブラン（Kovran），セダンカ（Sedanka）においてイテリメンの神話などを採録した（Jochelson 1975: 327–340）。

ボゴラスは２月末にカムチャツカを立ってイヌ橇でマリンスキー・ポストへ向かった。彼の旅は，橇イヌや自分たちの食料の入手を考慮して，カムチャツカ北部からチュコトカ南部のベーリング海岸に居住するケレックの集落を経るルートが予定されていたが，深刻な飢餓にみまわれていたケレックの多くの集落はすでに無人となっていた。ケレックはセイウチ狩猟を主な生業としてきたが，アメリカの捕鯨船によってケレックの沿岸に来遊するセイウチは北部に追いやられたためとされている。ボゴラス一行はやむを得ず内陸の山地を進む困難なものとなった。

ボゴラスはそのほかにもカムチャツカで知りえた北東部のコリヤークやケレックの集落に関する情報や，収集したコリヤークの資料を提供している。オホーツク海側のレキ

ニキ（Rekiniki）とコルフ（Korf）湾のアリュートルから収集した仮面（Jochelson 1975: 82–84）は，かつて存在した北東アジアの仮面文化を検討する上で重要である。

4 イテリメンに関するオリガ・ムラシュコの研究

モスクワ大学のオリガ・ムラシュコは二つのイテリメン，すなわち「カムチャダール」と「イテリメン」をめぐる課題を提示した（Murashko 1997）。ムラシュコは彼女の論文でロシア人との接触時からの呼称，カムチャダールを用いている。

現在，カムチャダール／イテリメンは，公式統計によればコリヤーク自治管区に居住する1,320人となっており，その内の約半数が，カブラン（380人）とチギリ（245人）に居住している。

1920年代末から1930年代初めにかけてのソ連における国家区分化によってカムチャダールの子孫たちは行政的に二つに分けられた。コリヤーク自治管区内（2007年７月以前の行政区分）の北西集団はイテリメン――自称――に属するようになり，“少数民族”の地位を得た。コリヤーク自治管区の南部に居住していたカムチャダールのほかの子孫たちは“ロシア化した（ロシア化されたが正しいか）”と分類され，1927年には“先住民”としての地位を奪われ，民族的にはロシア人と認定された。

しかし，“ロシア人”としての公式区分にもかかわらず，南部のカムチャダールの子孫たちは明確な民族的アイデンティティを保持しようとしてきた。彼らは自身をカムチャダールに帰属するものと考えている。1980年代のペレストロイカによっていくつかの先住権を主張することが可能となり，離れ離れになっているカムチャダールの集団を組織化することができた。1994年には先住民集団の記録にはカムチャダールと自認している者を9,000人以上あげている。

カムチャダール系の二つの集団――イテリメンとカムチャダール――は地理的にも観念的にも分かれている。このことは部分的には彼らの植民時代およびソ連時代の体験が異なることに基づいているのではないだろうか。“北方少数民族”としての認定がおよそ70年間のソ連の先住民に対する無定見な政策のなかでイテリメンが伝統的な文化のいくつかの部分を保持することを可能にした。しかし，1957年以降，強制的移住，古い集落の破壊，学校における先住民言語教育の中断と最終的な日常生活における固有言語使用が禁止される30年間の強力な統合政策期間が続いた。ペレストロイカ時代（1985–1991）は現在まで続く“民族復興”の始まりをもたらした。この復興は先住民が伝統的な資源を合法的に利用できることにはなっていないために経済的裏付けがない。初期のソ連時代についても，国家の支援は民族音楽や舞踊団，民族祭などの伝統文化の表面的部分を再現することに資金を出すことに限られていた。

5　日本人によるカムチャツカおよび周辺地域の研究

1990年代から谷本一之（北海道教育大学）らによるコリヤークの民族芸能調査が始まり，その後，大島稔（小樽商科大学）が中心となってカムチャツカの先住民文化に関する共同研究を組織した。共同研究者として岸上伸啓（国立民族学博物館），甲地理恵（北海道アイヌ民族文化研究センター），渡部裕（北海道立北方民族博物館）が加わった（大島編 1998）。また，同じころカムチャツカと周辺地域におけるイテリメン，コリヤークの言語学調査が始められた。

大島はカムチャツカの北部全域において，コリヤーク，イテリメンの狩猟，漁労，コリヤークのトナカイ遊牧などを精力的に調査した。渡部はカムチャツカ最北部を除くコリヤークやイテリメン，エベンの狩猟，漁労，コリヤーク，エベンのトナカイ遊牧について調査を行なった。

さらに渡部は1945年 8 月のソ連対日参戦以前に行われていた北洋漁業のなかで，日本人漁業者とカムチャツカ先住民との接触について調査を行なった（渡部 2001; 2003; 2005a; 2006b; 2011）。

5.1　ソ連体制にともなう集団化とその変遷

大島はコリヤークのトナカイ遊牧における政治的・経済的影響を検討する上で，4 つの時期，すなわち第 1 は帝政ロシア時代，第 2 はソビエト政権下における先住民生業の産業化とトナカイ遊牧民の定住化政策，第 3 に産業の拡大による生産性向上および中央集権強化のために進めた集落の再編（合併と廃村），第 4 がペレストロイカ以後の経済低迷期の区分を念頭に分析すべきとしている（大島 2005: 2）。

1930年代に入るとカムチャツカ各地にソ連体制が浸透し，トナカイ遊牧を基幹産業とする集団農場（コルホーズ）の建設が開始された。集団化導入は，いままでとは異なる組織や生産体制を新たに立ち上げなければならないため，障害となる人物を“革命の敵”といった罪名で排除した。こうした人たちは集落のリーダー的存在で，入植したコサックの子孫や学校の教員などだったという。

トナカイ遊牧によるコルホーズ化は，モデルケースとしての国営農場（ソホーズ）の建設も含めて，個人所有のトナカイをコルホーズの共有財産とするため，大規模トナカイ所有者は富農（kulak）と認定され，所有するトナカイの大部分が没収された（大島 2004: 4）。

トナカイ・コリヤークによるトナカイ遊牧の形態はチュコト半島のチュクチによるトナカイ遊牧と同じく，多頭数の群を管理する遊牧飼育であった。チュクチにおける多頭飼育は，トナカイの繁殖に適した18世紀後半から19世紀初頭にかけての寒冷な時期だと

されるが，多頭飼育は貧富の差を生み出していて，全人口の10％足らずの家族が全体のトナカイ頭数の60％を所有する寡占状態がみられた（佐々木 2006）。またチュクチだけではなく，カムチャツカのトナカイ・コリヤークにおいても同様に貧富の差がみられた（セルゲーフ 1937: 455–458）。

初期の集団化の実行はモデル事業としてソホーズがその役割をはたした。トナカイ遊牧を経済基盤とするために，トナカイ群を確保する方策は，農地の場合と同様に富裕者，すなわち大規模のトナカイ群の所有者からトナカイを奪取することであった。チュコト半島やカムチャツカ半島北部の飼育トナカイを一部で個人所有を認めながらソホーズやコルホーズに移管する作業が行われた（大島 1999; 渡部 2002: 67）。1930年から５ヵ年計画でそれら社会主義経済部門に移管できたのは総数600,000頭を越えるトナカイのわずか20％に過ぎなかった報告されている（セルゲーフ 1937）。

最初に伝統的にトナカイ遊牧を行っていたトナカイ・コリヤークの居住域やエベンのブイストル地区を中心にトナカイ遊牧のコルホーズが建設され，さらにそれ以外の遊牧可能な地域にも建設された。トナカイ遊牧の経験のあるコリヤークやエベンだけではなく，海岸コリヤークやイテリメンの人びともトナカイ遊牧組織に組み込まれた。こうした社会主義経済組織への先住民への組込みは，伝統的な集落から新たな拠点集落への移住を意味した。

トナカイ遊牧産業の目標はチュクチの大規模な多頭飼育方式の実現で，トナカイ飼育技術の向上や技術者の養成，獣医師の養成が図られ，科学的な観点から飼育方法が検討された。また，トナカイの加工についてもさまざまな検討のもとに計画された。多くの場合，トナカイ遊牧の現場には先住民が充てられ，コルホーズ，ソホーズの管理や経営の主要なポストにロシア人が就いた（渡部 2005b: 14–15）。

1960年代前後になると，各地に展開されたコルホーズの経営が悪化したことから，複数のコルホーズを集約してソホーズ化するトナカイ遊牧の拡大策が実施された。

5.2 トナカイ遊牧の発展──ソホーズ・カラギンスキーの発展状況

ソホーズ・カラギンスキーは1970年にベーリング海側のコルホーズとリキニキ地域のコルホーズが合同して設立され，センター（本部）がティムラットに置かれ，リキニキには支所が置かれた。コルホーズが合同したとき，6,000頭を超えるトナカイがいたが，1975年には8,000頭となり，トナカイの遊牧域は3,500,000haとなった。ソホーズ化とその発展状況についてはすでにソホーズ責任者の証言から報告している（渡部 2005b）。

全ソ連のトナカイ飼育ソホーズは成績を競い，そうした努力もあって10年間でトナカイの数を増やし，それまでの損耗率（病気やオオカミの被害による死亡，逃亡など）を6％にまで下げることができた。できるだけ年齢の若いトナカイを多く保つように努め，100頭の出産可能メス（バージンカ）当たり88頭の仔トナカイを出産させることができ

た（最も成績の良いトナカイ群作業隊ではこの率が98％に達していた）。トナカイが順調に増加してからは，リキニキ，ティムラットでは各6群を維持した。

各トナカイ群の構成は6人の牧夫と2人の女性が標準で，平均すると9人が属していた。全体で90人から92人が12のトナカイ群で働いていた。1992年まで17,300頭のトナカイを維持して，毎年約5,000頭のトナカイを屠殺しオッソラの食肉工場へ出荷していた。ソホーズの全労働者は220人で，1975年の給料の総計は380,000ルーブルであったが，1986年には1,500,000ルーブルに達した。当時の計画では牧夫1人当たり300頭のトナカイを維持することとされ，給料は4ルーブル／頭と決められていた。年末にトナカイの数を数えて，計画より数が多ければそれに応じてボーナス（「13月目の給料」と呼ばれた）がもらえた。ボーナスを10,000ルーブルも得たトナカイ群作業隊もあった。

ティムラット側では漁業が中心でトナカイ飼育は副業的なものだった。リキニキでも漁業をやっていたが，これらは自分たちの食料のためであり，販売用ではなかった。各トナカイ群作業隊は自分たちの漁場をもっていた。捕ったサケは塩蔵，乾燥，イヌの餌などにした。リキニキではアザラシなどの海獣狩猟を行って食料にし，毛皮を衣類や橇の牽引具などにした。

1975年の時点ではトナカイ飼育に従事する人たちの生活は，電力供給，食料補給，ラジオステーションの設置，映画の上映など恵まれた点もあった。ソホーズはトナカイの生産を高めるために牧夫たちの生活を改善しようとし，ティムラットに住宅，テレビ，店，品物の補給などの点で改善を図った。1980年までにリキニキについてはこうした改善は行われなかった。リキニキへの物資の輸送は年に1回で，ペトロパブロフスクから石炭，石油などを積載した船がやってきたが，ティムラットには多くの船がやってきた。

ソホーズは構成員の食料や衣類の供給についても責任をもち，各人はソホーズに注文し，ソホーズはそれらを取り寄せた。

5.3　集住化と集落の再編

ソ連体制が破綻したペレストロイカ以降，多くの伝統的な集落，コルホーズ時代の集落の閉鎖を経て今日に至っている。トナカイ遊牧組織も，トナカイ肉の販路の問題や生産活動を支える資金が事実上無くなったことによって，規模の縮小や消滅にみまわれている。そうした状況のなかでもソ連体制以前と比較すると集落の消滅した人口空白地域が拡がり，カムチャツカ全体では1926年の集落数122から1998年には22まで減少していて，規模を縮小してトナカイ遊牧を継続している地域もある（大島 2004: 9）。その意味では集団化の試みは，人と環境の歴史的つながりを断ち切ってきたともいえる。

5.4　先住民の生活と変化

1930年代から始まった集団化にともなって集団農場の施設や構成員の住環境の整備が

実施されてきている。カムチャツカの場合は小規模な伝統集落が営まれていたため，数百人が居住できる拠点の集落を建設するためには新たに住宅や共同施設，農場関連施設を構築しなければならなかった。道路網や港湾設備がほとんど未整備の僻遠の地に建築資材を輸送しなければならなかったため，集落の建設は大きな財政負担となっていた。1960年代から1970年初頭にかけて，カムチャツカ各地の集団農場を国営農場へと再編する際には，集落の再編も行われた（大島 2004; 渡部 2006a）。

この集落再編時に建設された多くの住宅が現代まで使われてきている。住宅はそれまでの平屋建て（一戸建て，あるいは２～３軒長屋）から集合住宅（アパート）が中心となり，発電設備による電気供給はもちろん，給湯・暖房システム（熱ステーションによる），水道，下水道などの近代的な生活インフラが整備された。寄宿舎が併設された学校，幼稚園などの教育施設，売店，住民ホールなども整備された。個々人の住宅には電気コンロや電気オーブンの調理器が設置され，電機洗濯機，テレビは言うにおよばず，水洗トイレ，給湯・暖房システムもそなわっているのが一般的であった。これら住宅設備は1970年代前後の日本の平均的な一般家庭のレベルと比べて遜色はなく，むしろ日本より整備の時期は早かったと考えられる。

しかし，当初からこうした生活インフラの一部が整備されなかった集落もあった。例えば，カブラン村の一部のアパートにはトイレがなく，戸外に非水洗式の共同トイレが設置されている。しかも集落の再編では一度に多くの住宅を整備する必要があったため，この時期に建設された住宅／アパートには建築資材の問題から防寒対策が不十分なものが多いという。

国営農場には先住民とともに移住者である多くの非先住民も働いていた。トナカイ遊牧の場合，現場でトナカイを放牧する作業隊の大部分は先住民で，移住者である非先住民は管理部門や畑作，その他の畜産部門で働く場合が多かった。畑作におけるトラクターのオペレーターやその他の車両の運転技術員には非先住民が多かったという。こうした動力関係の操作員のサラリーは比較的優遇され，同じ国営農場のなかでもトラクターのオペレーターはトナカイ遊牧に従事する先住民の倍のサラリーをもらっていたという。

生産物の輸送，燃料やさまざまな物資の補給，旅客に対する交通輸送システムは産業や生活に欠かせない重要な要素である。ところがカムチャツカではソ連時代をつうじて道路網の整備が不十分で，遠隔の地にある集落への輸送は船舶か航空機によってカバーしてきた。道路整備が進まなかった要因は人口密度が低い（0.76人／㎢）ことに加え，多くの河川，湖沼，湿地，活火山を含む山岳，ツンドラ帯などの地勢的特徴から道路建設に多額の資金が必要だったためである。石炭や石油などの燃料や建築資材といった大型物資の輸送は船舶が行い，消費財や旅客は航空機が担ってきた。とくに後者はソ連がさまざまな型式の航空機を開発し運用してきた航空機大国であったことや戦時体制への即応を念頭においた臨戦態勢国家であったことと無縁ではない。

定期航空路線はペトロパブロフスク・カムチャッキー（エリゾボ空港）を拠点とする南部航空路線網および北部のティリチキを拠点空港とする北部航空路線網によって各地と結ばれていた。また不定期な物資輸送もさかんであった。例えば現在週に 2 ～ 3 便しか定期便のないチギリ空港ではソ連時代には毎日 7 便が離発着していたという。船便も頻繁に利用され，ペトロパブロフスク港の客船ターミナルはいつも乗客でにぎわっていたという。

5.5 ペレストロイカ以降の先住民の経済的状況

ペレストロイカ以前，地域の主要産業であった国営農場・国営企業は資本主義体制への移行とともに解体あるいは縮小された。その最大の要因は国内外における需要の有無や製品の輸送コストの問題に起因している。典型的なものとしてトナカイ遊牧組織をあげることができる。ソ連時代をつうじてトナカイ遊牧産業はカムチャツカを含むシベリアから極東地域の集団農場あるいは国営農場の主要な生産部門の一つであった。しかし，理由はあきからではないものの，生産されたトナカイ肉は都市部へ出荷されることなく，ひたすら地域住民の消費に供されていた。トナカイ肉の新たな消費地は開拓されなかったわけである。この間，トナカイ遊牧産業は国営企業として手厚く保護され，補助金によってトナカイ肉の販売価格は低く抑えられ，地域住民は安価なトナカイ肉を手に入れることができた。こうした体質が市場経済下でトナカイ遊牧産業の衰退した理由である（渡部 2005b: 25）。言語学者呉人惠（富山大学）のトナカイ遊牧民の調査地はヨヘルソンが辿ったコルコドン川（コリマ川の支流）より東方寄りのオモロン川（コリマ川の支流）の流域であるが，やはりトナカイ遊牧が縮小されつつあると報告している（呉人 2006）。

6 日本人漁業者と先住民の接触

日露戦争終結以降から第二次世界大戦末期まで行われてきたカムチャツカ半島などロシア極東部沿岸における「北洋漁業」の進展にともない，カムチャツカで漁業を行っていた日本人と現地の先住民との接触が確認されている。このことはロシア領海内における漁業が，ロシア領内の海岸の一部を借地し，そこに日本人漁業者の宿舎や加工施設，倉庫などを建設して漁獲と加工を行う「陸上根拠」で行われていたからである。漁業のシーズンが始まる前に日本人は送込み船でカムチャツカに来航して，資材とともに漁場に上陸し，漁期が終わると日本に帰国する。こうした日本人漁業者と漁場の周辺に居住する先住民との間の接触の状況は，ロシア・ソ連の監視体制の在り方によって違いがみられたが，初期においては濃密な接触が見られた地域もある。

6.1 日本人はどのように捉えられていたか

露領沿岸漁業はロシア側に日本の漁業技術を移転する役割を果たしていた。現在でもカムチャツカのサケ漁で日本式の建網が使われている。日露漁業協約締結後，ロシアはいたずらに日本の漁業進出を傍観したわけではなく，自国の企業に漁場経営を促した。しかし，当時のロシア極東には漁の技術・資材と製品の市場の両方が存在しなかったため，ロシア企業はそれらを日本に依存して開始せざるを得なかった。カムチャツカでは日本側の漁場とあわせると最盛期には30,000人を超える日本人が働き，当時のカムチャツカの先住民の人びとにとって，漁場で働く日本人の姿は風景の一部であった。現在でも当時の日本人のことを鮮明に記憶する先住民の人たちが存在するが，それら記憶の多くは日本人との好ましい交流や印象のことが多い。カムチャツカ半島北東部のカラガ村に住むあるコリヤークの女性の記憶もそうした一つである。彼女は1923年生まれで，少女の頃の体験を鮮明に語ってくれた。「当時は各川の河口近くのすべてに日本の漁場があった。カラギンスキー島を臨むカユムという小湾で，日本人が働きながら歌うのを聞いた。日本人は昼も夜も働き，いつも歌っていた。よく働く人たちだというのが日本人に対する皆の印象だ。ある朝起きてみると静かなので不思議に思っていたが，それは日本人が去ったからだった。」それは1941年秋のことであった。

6.2 語り継がれる日本語の語彙

カムチャツカにおける漁業では和船が使われ，それはロシア人の漁場でも同様であった。理由は海岸で船の揚げ降ろしをするために平らな船底の和船が適していたからである。「カワサキ」，「サンパン」（三羽船の意），「イサブンカ」（磯舟のこと，現在では「サブンカ」と発音されている）といった小型漁船の日本語名称や「セントー」（船頭）やクリバン（砂浜で水に浸かりながら船の揚げ降ろしをする「唐繰番（からくりばん）」に由来）など漁業者の職名に対する日本語名称が伝えられている（渡部 2003）。ソ連は1930年代初には自国の漁業の「脱日本化」をめざし，それまで函館で日本人労働者を雇い入れてきたが，1933年からは日本人の募集を止め，労働者を自国民でまかなうようになった。しかし，その後も漁業資材の仕入れは日本から行われ，さらには「和船」の自国生産も行われるようになった（写真２）。

6.3 日本人漁業者と先住民との接触の在り方

- サケをめぐる売買関係：日本企業が先住民からサケを購入した。
- 漁業の技術指導：網の作り方や漁業技術を教えた。
- 先住民を雇用：日本の漁場で先住民を雇用した。
- 毛皮の売買：先住民から毛皮を購入した。



写真２　カムチャツカ川河口近くの川岸に桟橋代わりに並べられた廃船。かつて100㎞上流のクリュチで建造された和船型の漁船クンガス。（2005年８月，筆者撮影）

- 漁場の冬季番人：冬季の日本漁場の番人として先住民を雇用した。
- 医療をめぐる接触：拠点となる漁場に配置された医師の治療を受けた，薬剤を譲ってもらった。
- ロシア／ソ連企業における日本人の雇用：先住民と日本人が一緒に働いた。

7　ペレストロイカ以降の人口減少

ペレストロイカ以降のカムチャツカにおける顕著な変化は人口減少である。2002年の国勢調査ではかつてのコリヤーク自治管区（以下「KAO」と表記）の人口は25,157人と減少し，最大に達した1989年国勢調査の39,940人の約63％まで落ち込んでいる。この人口減少は先住民人口（コリヤーク，チュクチ，イテリメン，エベンの合計）が横ばいでほとんど変化しなかったのに対してロシア系およびウクライナ系の人口がおよそ50％減少したことによって生じている。

住宅の修繕や更新，生活インフラの維持や更新もKAOにおいては大きな課題である。村の施設を含めて住宅等の修繕は予算化されず，ペレストロイカ以降20年間にわたって行われてこなかった。当然のことながら発電設備や給湯・暖房システムの老朽化が問題となっていて，とくに給湯・暖房システムは配管の更新をともなうことから深刻な問題となってきている。実際にチギリ地区のカブラン村やカラギン地区のイリプイリ村のように給湯・暖房システムが機能しなくなったところもある。

8 先住民における疫学転換と変死

アラスカおよびロシア極東の先住民の社会的，心理的，身体的健康を比較するためのプロジェクトの一部として，カムチャツカ先住民の疫学調査が行なわれた（Bogoyavlensky 1997）。

カムチャツカのコリヤーク管区，ブイストル地区，アリュート地区に居住する先住民，コリヤーク，イテリメン，エベン，アリュート，チュクチについて，その死亡要因が調査された。データは1958年から1993年の期間の5,933例の死亡証明書から，性，年齢，民族，死亡要因を手作業で記録した。

説明されている死因は，（1）感染性疾患と寄生虫性疾患，（2）腫瘍（新生物）および心臓血管性疾患，（3）呼吸器系疾患，（4）心的外傷，アルコール中毒症，溺死，凍死，殺人および原因不明，自殺（これらを総称して violent death・変死と呼ぶ），（5）その他，あるいは不明，以上の五つである。

1950年代後半からソ連の北方先住民への政策は近代的な医療をもたらすことで，感染症の罹患率を低下させたが，同時にマイナスの結果ももたらした。これらには強制移住や退去によって北方民族の伝統的な経済の崩壊や伝統的な社会組織の破壊が含まれる。1950年代末までにカムチャツカのすべての移動生活をする先住民は定住を強制された。

先進国の近代化の過程では，医療の発達によって死亡率が低下するとともに，死亡の主要な要因が感染症から変成症（ガンや心臓・血管疾患など）へと変化する疫学転換が生じることが知られている。

調査期間を通じて，感染症の罹患率と死亡率は高いままであったが，重要なことは心的外傷，アルコール中毒症，溺死，凍死，殺人および原因不明，自殺が死亡の主要な原因であり続けていることである。全般的にみて，社会経済的発展の結果として北方先住民社会に生じた健康状態と死亡率の好ましい変化が心的外傷に起因する死亡率の増加によって帳消しになっている。心的外傷に起因する膨大な死亡を考えると，他の要因による死亡率の全ての変化はとるに足らないものである。

本論文の示すデータはペレストロイカ期に行われた反アルコール運動がカムチャツカの先住民の間においても生易しいものではなかったことを示している。常に高い死亡率が続いているなかで1987年を最下限とする鋭い落ち込みとなっており，おそらく完全にアルコール飲料（ウオッカ）が相当の期間無くなったことを意味している。しかし，その後のアルコール飲料入手の自由化後には死亡率の高さは元に戻っている。

9 まとめ──新たな制度導入と研究課題

ソ連時代を通じて先住民社会を巻き込んだ集団化，移住，集落の閉鎖，集落の再編と

いった，住み慣れた場所から強制的に移住されられたことなどによって，多くの先住民は心的外傷を受けてきた。そうしたことが要因となって，アルコール依存症やそれが引き起こす暴力や自殺などが高い割合で続いてきた歴史があきらかとなっている。

いっぽう，ペレストロイカ時代（1985–1991）は現在まで続く“民族復興”の始まりをもたらしたものの，先住民の生活の拠りどころであった集団農場や国営農場は解体され，収入を得る手段を失った。先住民は自家用のサケ漁など伝統的な資源の利用を一定程度認可されていたものの，収入を得るまでの資源利用は認められなかった。ところが，2010年代前半から連邦政府はかつてのロシア農村の“共同体”を意味するオプシチーナ（obshchina）という言葉を用いて，先住民団体に対して伝統的な資源であるサケやトナカイ遊牧その他の経済行為に対する道を開いた。先住民が構成員となる先住民団体・オプシチーナを登録し，それに対して，例えばサケの漁場と漁獲枠を，団体の規模などに応じて与えるというものである。この政策は先住民に大きな活力を与えたように感じてきた。こうした先住民団体によるサケの漁場を西海岸南部のオクチャブリスキーやカムチャツカ川流域のクリュチやウスチ・カムチャツカで視察したが，活気にあふれている印象をもった。

クラシェニンニコフやステラーによるカムチャツカ先住民に関する記録（Krasheninnikov 1972; Steller 2003），また，ヨヘルソン，ボゴラスによる記録の重要性を改めて認識できた。これら先人たちの遺産は現代に生きるカムチャツカ先住民にとっても祖先の伝統文化を認識するものとして大切なものとなっている。現在でも50〜60年以前のことを記憶している人たちが存在する。そうした文化の記憶を丹念に拾い出すことでかつての文化を部分的に復元することができるのではないかと考える。例えば，アリュートルの文化について，丹念な聞き取り調査によって今の時点でもある程度の成果が得られる可能性があると思われる。

参照文献

＜和文＞
大島稔
1999 「カムチャツカ半島コリヤークの伝統的生業（トナカイ飼育）における変化」北海道立北方民族博物館編『第13回北方民族文化シンポジウム報告』pp. 33–40，網走：財団法人北方文化振興協会。
2004 「コリヤークのトナカイ遊牧」『第19回特別展　北の遊牧民──モンゴルからシベリアへ』（展示図録）pp. 47–51，網走：北海道立北方民族博物館。
2005 「コリヤークのトナカイ遊牧に関する政治経済的考察──カムチャツカ州カラギンスキー地区を例に」北海道立北方民族博物館編『第19回北方民族文化シンポジウム報告』pp. 1–4，

網走：財団法人北方文化振興協会。
2006 「カムチャツカ半島コリヤークの伝統的生業―トナカイ遊牧の変遷」北海道立北方民族博物館編『環北太平洋の環境と文化』pp. 155–167，札幌：北海道大学出版会。
大島稔編
1998 『カムチャツカ半島諸民族の生業・社会・芸能』（文部省科学研究費補助金1996–1997 国際学術研究調査報告書）小樽：小樽商科大学言語センター。
岸上伸啓
2015 「環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する人類学研究の歴史と現状―日本人による文化人類学的研究を中心に」岸上伸啓編『環北太平洋地域の先住民文化』（国立民族学博物館調査報告132号）pp. 7–77，大阪：国立民族学博物館。
呉人惠
2006 「トナカイ遊牧民コリヤークの伝統と現代」北海道立北方民族博物館編『第21回特別展　コリヤーク―ツンドラの開拓者たち』pp. 36–41，網走：北海道立北方民族博物館。
黒田信一郎
1992 「チュクチの抵抗―北東シベリア原住民の受難史」岡田宏明・岡田淳子編『北の人類学』pp. 161–184，京都：アカデミア出版会。
佐々木史郎
2006 「北方ユーラシアのツンドラ帯におけるトナカイ多頭飼育―ネネツとチュクチの比較」北海道立北方民族博物館編『環北太平洋の環境と文化』pp. 117–131，札幌：北海道大学出版会。
セルゲーフ, M. A.（ソ連科学アカデミー）編
1937 『堪察加経済事情』日露通信社（竹村広吉等）訳，東京：露領水産組合。
レーチコ，ベ・ア
1943 「コマンドル諸島のアレウート族」松原露天訳『北方研究』8–9: 241–261。
渡部裕
2001 「カムチャツカ先住民の文化接触―北洋漁業と先住民の関係」『北海道立方民族博物館研究紀要』10: 17–46。
2002 「カムチャツカ半島の資源をめぐるパラドクス―サケとトナカイの関係」秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海―水産資源の管理の人類学』pp. 208–227，京都：人文書院。
2003 「『クンガス』と『兵丹パン』の間―カムチャツカにおける文化接触の象徴」『北海道立北方民族博物館研究紀要』12: 37–49。
2005a「カムチャツカの日本人漁業者―先住民の記憶と日魯漁業史料から見えるもの」『市立函館博物館研究紀要』13: 1–18。
2005b「ポスト社会主義経済下のトナカイ飼育産業―カムチャツカの現状と将来」『北海道立北方民族博物館研究紀要』14: 9–28。
2006a「カムチャツカ先住民社会における集団化，集落再編とその影響」『北海道立北方民族博物館研究紀要』15: 19–28。
2006b「カムチャツカにおける漁業と先住民社会―日本人の果たした役割」北海道立北方民族博物館編『環北太平洋の環境と文化』pp. 168–181，札幌：北海道大学出版会。
2011 「カムチャツカにおける日本人漁業とロシア／ソ連漁業の関係―日本人漁業は何をもたらしたか」『北海道立北方民族博物館研究紀要』20: 119–136。

＜欧文＞

Black, L. T.

1988 Aleut: Islanders of the North Pacific. In W. W. Fitzhugh and A. Crowell (eds.) *Crossroads of Continents*, pp. 70–82. Washington DC: Smithsonian Institution.

Bloch, A. and L. Kendall

2004 *The Museum at the End of the World: Encounters in the Russian Far East.* Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Bogoras, W.

1975 *The Chukchee* (The Jesup North Pacific Expedition: Memoir of the American Museum of Natural History, Vol. 7). Edited by F. Boas. New York: AMS Press.

Bogoyavlensky, D. D.

1997 Native Peoples of Kamchatka: Epidemiological Transition and Violent Death. Translated by M. Volshonsky. *Arctic Anthropology* 34(1): 57–67.

Jochelson, W.

1975 *The Koryak* (The Jesup North Pacific Expedition: Memoir of the American Museum of Natural History, Vol. 6). Edited by F. Boas. New York: AMS Press.

Krasheninnikov, S. P.

1972 *Explorations of Kamchatka 1735–1741: North Pacific Scimitar* (North Pacific Studies Series). Portland: Oregon Historical Society.

Lantis, M.

1984 Aleut. In D. Damas (ed.) *Handbook of North American Indians, Vol. 5: Arctic,* pp. 161–184. Washington DC: Smithsonian Institution.

Murashko, O.

1994 A Demographic History of the Kamchadal/Itelmen of Kamchatka Peninsula: Modeling the Precontact Numbers and Postcontact Depopulation. *Arctic Anthropology* 31(2): 16–30.

1997 Itelmens and Kamchadals: Marriage Patterns and Ethnic History. *Arctic Anthropology* 34 (1): 181–193.

Мурашко, О.

2000 История оленеводства в бы,ыцтринском районе Камчатки. *МИР Коренных Наробов: Живая Арктика* 2000(3): 62–67.

Steller, G.

2003 *Steller's History of Kamchatka* (Historical Translation Series 12). Translated by M. Engel and K. Willmore. Fairbanks: University of Alaska Press.